

---

実践報告

---

健診センターにおける  
CPRシミュレーションの現任教育としての有用性  
－医療関連職種間の連携の深まりと業務改善の可能性－

大出 明美<sup>1</sup>, 嘉手苺 英子<sup>2</sup>, 高尾 実千代<sup>3</sup>

The Usefulness of Health Screening Center Based CPR  
(Cardio Pulmonary Resuscitation) Simulation as In-service Training:  
the Potential for Deepening Collaboration among  
Medical Staffs and Service Improvements

Akemi Ode, Eiko Kadekaru, Michiyo Takao

キーワード：心肺蘇生法、CPR模擬訓練、現任教育、健診センター

key words : CPR (Cardio Pulmonary Resuscitation), CPR training and simulation,  
in-service training, health-screening center

抄録

心肺蘇生法（以下CPRとする）シミュレーションに関する著者らの先行研究（大出他，2009，p.97）から臨床現場で行うCPRシミュレーションには、単にCPRの手技など技術獲得に留まらない学習効果があることが、急性期病棟における研究で明らかになった。

本研究の目的は、現任教育の一環としてA病院の健診センターにおいて実施したCPRシミュレーションにおけるグループ討議および質問紙調査の結果からその有用性を検討することである。

対象は、健診センターの医師・看護師・保健師・管理栄養士・検査技師・看護助手・医療事務の様々な医療チームメンバーである。CPRシミュレーション実施後の質問紙調査とグループ討議記録から、データ収集分析を行った結果、救命という目的の共有によって医療チーム間の連携が深まりモラルも高揚して、業務改善の気付きと日常のCPRの教育普及につながる可能性を得た。

今回、健診センターにおいてCPRシミュレーションを行ったところ現任教育として有用であることが示唆された。

---

受付日：2009年8月28日 受理日：2010年1月29日

1. 日本赤十字社沖縄県支部 Japanese Red Cross Society Okinawa Chapter 2. 沖縄県立看護大学 Okinawa Prefectural College of Nursing 3. 日本赤十字九州国際看護大学 The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

## I. はじめに

臨床現場で行う心肺蘇生（以下CPRとする）シミュレーションには、単にCPRの手技など技術獲得に留まらない学習効果があることを、急性期病棟におけるCPRシミュレーションに関する著者らの先行研究で明らかにした（大出他，2009，p.97）。

健診センターは、入院患者に比べて健康レベルの高い利用者が多いことからスタッフがCPRに遭遇することは少ないと考えられるが、皆無とは言えない。また医師や看護師以外のスタッフも多く配置されていることから、CPRを行う状況が発生した場合には、チームメンバー間の連携がより重要となってくる。そこで、前述の結果を受けて、健診センターにおいて、事務職を含む医療関連職種ของทีมメンバー全員が参加してCPRシミュレーションを実施した。本研究の目的は、健診センターにおいて実施したCPRシミュレーションにおけるグループ討議および質問紙調査の結果から現任教育としての有用性を検討することである。

## II. 研究方法

### A. 対象

A総合病院 健診センターの医療チーム25人（医師1人、看護師7人、保健師1人、管理栄養士1人、検査技師2人、看護助手3人、医療事務10人）。

### B. データ収集方法

CPRシミュレーションは、A総合病院健診センターにおいて、2008年4月に2回、2009年2月に1回、計3回とも同じ内容を実施した。CPRシミュレーションには医療チーム全員が参加し、1人を除き、同じメンバーが3回とも参加した。健診センターの一角にマネキン患者シミュレータを用いて急変の場面を想定、看護師、医師等の役を決めて行い、CPRの範囲は二次救命処置とした。筆者は、CPRシミュレーションのファシリテーターとして参加して進行を担い、終了後には全員での振り返り・評価の進行役を担った。

#### 1. グループ討議

CPRシミュレーション実施後の2008年4月と2009年2月に、参加者全員で振り返りのためのグループ討議を約1時間行った。討議内容を録音し、逐語録を作成した。

#### 2. 構成的質問紙調査

2009年2月の実施後に、参加した医療チームメンバーに、CPRシミュレーションを実施した感想、自分の業務に役立ちそうか、連携強化への影響、継続の必要性に関する構成的質問紙調査を行った。回答は段階別チェック方式で、加えて項目毎に回答理由を記述する自由記述欄を設けた。質問紙は、回収箱を使って回収した。

### 3. データ分析方法

質問紙調査の結果は、質問項目毎に段階別回答の分布状況を分析した。

またグループ討議の逐語録と質問紙の自由記述の内容を類別し、カテゴリ毎にその内容を短文で表した。質問項目毎の分布状況とカテゴリの内容から健診センターにおけるCPRシミュレーションの現任教育としての有用性について検討した。分析内容の信頼性・妥当性を確保するため、自由記述の類別や短文の作成に関して、共同研究者間で矛盾がないかを確認しながら進めた。

### C. 倫理的配慮

質問紙調査およびグループ討議の記録を研究に活用するに際して、参加者に研究目的および、承諾は自由意思に基づくもので、質問紙調査等の記録内容は厳重に守秘し、分析に際しては、対象者が特定されないようデータ化することを説明し、口頭で承諾を得た。なお本研究の実施は、A総合病院の看護師長・係長会議において承認を得た。

## III. 結果

### A. CPRシミュレーションに対する参加者の評価

質問紙調査の回収率は、92%（23人/25人）であった。CPRシミュレーションに参加してよかったかの項目では、とてもよかった83%（19人/23人）、よかった4%（1人/23人）で、無回答が13%（3人/23人）であった（図1）。また自分の業務に役立ちそうかの項目では、とても役立つ57%（13人/23人）、役立つ30%（7人/23人）で、無回答が13%（3人/23人）であった（図2）。次にCPRシミュレーションは医療チームメンバーの連携がよくなると思うかの項目では、とても思う92%（21人/23人）、ある程度思う4%（1人/23人）で、無回答が4%（1人/23人）であった（図3）。さらにCPRシミュレーションは継続した方がよいかの項目では、このまま継続87%（20人/23人）、少し変えて継続13%（3人/23人）と全員が継続した方がよいと答えた（図4）。「少し変えて継続」の内容は、「CPRシミュレーションを年一回ではなく、年二回（4月頃と10月頃）に増やしてほしい」「隣のリハビリ室のメンバーも一緒に訓練してはどうか」「質問紙の職種等記入は無くした方がよい」であった。以上より、健診センターで行ったCPRシミュレーションに対して参加者は積極的な評価をしていたことがわかった。

### B. グループ討議と質問紙調査の自由記述の内容分析

2008年4月はグループ討議のみを行い、2009年2月にはグループ討議と質問紙調査を実施した。2009年2月のグループ討議における参加者個々の意見は、質問紙調査の内容により詳細に表現されていたので、内容分析には2008年4月のグループ討議と2009年2月の質

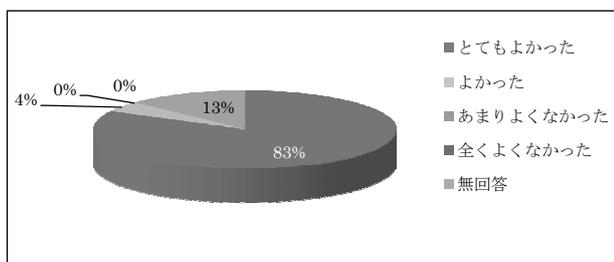


図1. CPRシミュレーションに参加して

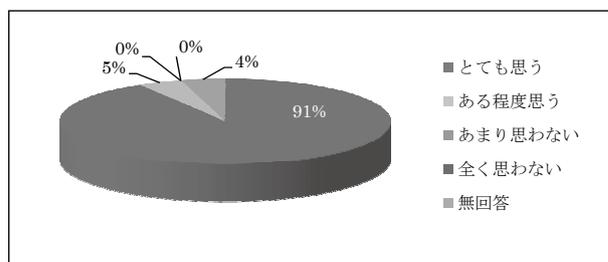


図3. 連携がよくなるかについて

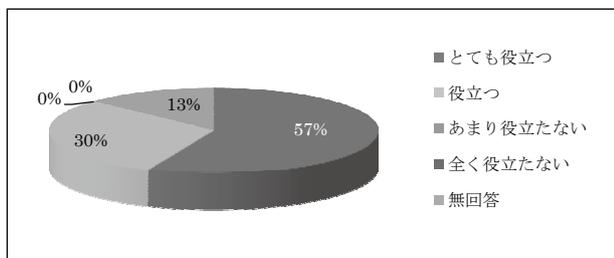


図2. 自分の職務に役立つか

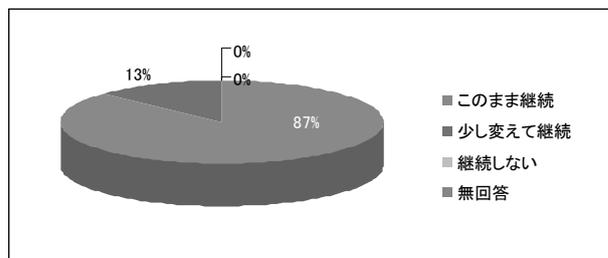


図4. 継続したほうがいいかについて

問紙調査結果を用いた。グループ討議内容と質問紙調査の自由記述の内容を分類し、CPRの技術習得、物品点検・環境整備の工夫、医療関連職種間の連携強化、業務改善、モラルの高揚、危機管理意識、定期的教育の大切さ、に関する7項目のカテゴリーを取り出した(表1)。各々のカテゴリーについてその内容を短文に表したものを以下〈 〉で示す。

1. 〈CPRの状況に対応する技術の習得とその為のイメージトレーニングの大切さを感じた〉

CPRシミュレーション後に看護師は、「技術を正確に身につけないといけない」「実際行って自分の足りない部分があった」「心臓マッサージ・挿管はかなり以前にやったので勉強になった」など自分の技術についての具体的な手技の反省をあげ、救急に備えてCPRに対応する技術の習得に関する意見を述べていた。また看護助手は、「救命処置に携わっている看護師が救命に集中できるように、心臓マッサージや記録、周囲の片付けなど看護師の指示をきいて看護助手にもできる手伝いを行いたい」など、看護師への協力について積極的な意見があった。さらに検査技師から「急変時の対応で医師・看護師など協力者を呼び、気道確保・心臓マッサージを行う」などCPR状況下で基本技術を用いて自ら対応するという意見があった。事務職を含む医療チームのメンバー全職種がCPR状況下で積極的に対応するために基本技術の習得を含めた行動化を目指していた状況が明らかになった。さらに、ほとんどの看護師から「普段からCPRシミュレーションのイメージトレーニングを行う事によって緊急時に受診者に対して安全に、確実な高度の医療行為が実施できる」「看護師は受診者の一番近い所にいます。常に受診者の動きを敏感にキャッチし、安全な医療行為を実施する為に日頃からイメージトレーニングを行い確実

で素早い技術を身につける」との意見があり、CPRの状況に対応する技術を習得していくには、イメージトレーニングが大切であると感じていることがわかった。

2. 〈物品の点検および環境整備を工夫していった〉

看護師から「ME機器のコードを1本ずつまとめる際、巻きがきついとくい込んで取り出しに時間がかかり、取り出しにくかった」「大腸ファイバー室の入口の椅子は、使用後に奥の部屋に片付けるようにCPRシミュレーション直後からしています。係りも決めて業務改善しました」「狭い場所での急変に看護師はどう動けばよいのかを体験することが出来てよかった」「室内が狭い所なので、挿管介助時立ち位置に戸惑った」などの意見があり、体験を通してより具体的な物品の取り扱いや環境整備方法の示唆を得ていた。

また医療事務職から「救命カート・ストレッチャー等、最低限必要な物品の保管場所の一覧表があるといい」、また保健師からは「物品をどこに置いているかなど名称と合わせて物品配置図があるとよい」、看護助手からは「コンセント設置場所や救命カート内の延長コードや物品の置き場が分からずに戸惑った。反省して物品の置き場を覚えたい」など、緊急時に必要な物品の置き場所について体験を通して得た具体的な解決策が提案された。

その他に、「搬送しやすいように椅子や植木鉢など受診者に配慮して去年よりも上手く片付けられるようになった」「CPR場面が受診者から見えないようにスクリーンを置いて工夫した」など環境整備を受診者中心に考え、細やかに配慮する意見があった。

3. 〈医療関連職種間の連携が強化された〉

看護師から「皆の命を助けたいと思う気持ちが一つになったと思います」「看護師だけでなく事務・検査

表1. グループ討議と質問紙調査の自由記述の内容分析

グループ討議とアンケート調査の内容	カテゴリーの内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>・技術を正確に身につけないといけない・実際行って自分の足りない部分がわかった</li> <li>・救命処置に携わっている看護師が救命に集中できるように…看護師の指示をきいて看護助手にもできる手伝いを行いたい</li> <li>・急変時の対応で医師・看護師など協力者を呼び、気道確保・心臓マッサージを行う</li> <li>・普段から…イメージトレーニングを行う事によって緊急時に受診者に対して安全に…医療行為が実施できる</li> <li>・心臓マッサージ・挿管はかなり以前にやったので勉強になった</li> <li>・看護師は受診者の一番近い所にいます…安全な医療行為を実施する為に日頃からイメージトレーニングを行い確実に技術を身につける</li> </ul>	<p>CPRの状況に対応する技術の習得と、その為のイメージトレーニングの大切さを感じた</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ME機器のコードを1本ずつまとめる際、巻きがきついと…取り出しに時間がかかり…</li> <li>・大腸ファイバー室の入口の椅子は、使用後に奥の部屋に片付けるように…しています、係りも決めて業務改善しました</li> <li>・室内が狭い所なので、挿管助時立ち位置に戸惑った</li> <li>・狭い場所での急変に看護師はどう動けばよいのかを体験することができた</li> <li>・救急カート・ストレッチャー等、最低限必要な物品の保管場所の一覧表があるといい</li> <li>・物品がどこに置いているかなど名称と合わせて物品配置図があるとよい</li> <li>・コンセント設置場所や救急カート内の延長コードや物品の置き場が分からずに戸惑った</li> <li>・搬送しやすいように椅子や植木鉢など受診者に配慮して去年よりも上手く片付けられる…</li> <li>・CPR場面で受診者から見えないようにスクリーンを置いて工夫した</li> </ul>	<p>物品の点検および環境整備を工夫していった</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・看護師だけでなく事務・検査技師・助手も一緒になって心が一つになったようであった</li> <li>・皆の命を助けたいと思う気持ちが一つになったと思います</li> <li>・同じ意識をもって協力しないと迅速で良いCPRはできないのでシミュレーションをすることで息も合ってきて一体感も出てくると思う…グループワークでコミュニケーションも図られるので自然と団結しやすく連携がよくなっていく…</li> <li>・救命処置はチーム皆の協力があって出来ることで連携はよくなる</li> <li>・緊急事態には誤った判断はとても危険なこと、スタッフ間の声かけはとても大事と実感した</li> <li>・日頃からチームワークを大切に、意識的に安全確保の知識を身につけていきたい</li> <li>・看護師・医師だけでなく全スタッフの士気向上や結束にも役立つ</li> <li>・迅速な対応には皆の協力なしにはありえない、連携はシミュレーションによってよくなる</li> <li>・メンバーの協力なしでは…的確な対応は不可能だ…皆で連携をとって行動する意識が生まれる</li> <li>・スタッフ各自で具体的な役割分担を確認自覚できたのでチームの連携につながる</li> </ul>	<p>医療関連職種間の連携が強化された</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・スタッフ各自で具体的な役割分担を確認自覚できた…、…自分もよく理解しておくことで…</li> <li>・大腸ファイバー室の入口の椅子は…片付けるように…しています、係りも決めて業務改善しました</li> <li>・看護師の指示をきちんと確認して実行できる…、受診者を誘導するシミュレーションもやりたい</li> <li>・家族への連絡を忘れていた・家族への対応を設定していなかった、…落ち着いた行動を…</li> <li>・事務職でもできること、具体的には、緊急時コール・斉放送・家族への連絡などを協力したい</li> <li>・落ち着いた確定的確に状況判断して迅速に行動するなど何をすればよいか分かった</li> <li>・救急カート運搬時…片付ける…、受診者への説明や誘導、保険診療カルテの依頼…</li> </ul>	<p>医療チームメンバー各自の役割意識が拡大して業務改善につながる気付きを得ていた</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・事務とはいえず…自分もよく理解しておくことで看護師の負担を減らして協力合せてスピーディに作業を進めることができ救命率もアップすると思った</li> <li>・改めて命の重みを感じさせられた…受診者を守る為にも訓練・訓練…</li> <li>・皆の命を助けたい…</li> <li>・日々の業務の中でCPRはほとんど無いが、いざという時に動けないと命を助けることはできない</li> <li>・チームの連携が大切、一分一秒でも患者を救おう</li> <li>・…事務スタッフは、…優能だけでなく意識が高い。…参加も意欲的で改善面の指摘も鋭い。一緒に仕事できて誇りに思った</li> <li>・シミュレーション終了後も人形を使用して看護師が互いに意見を出し合っていた</li> <li>・日常において、いつ・どこで…おこる事かもしれない、…CPRシミュレーションは参加して良かった</li> <li>・院外の普段の生活でも役立つと…</li> </ul>	<p>モラルが高揚し、異なる職種のメンバーへの尊重と日常生活にも広がる可能性が生じた</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「可能性があることは起こる」を前提に危機管理を行う必要がある</li> <li>・定期的に行うことで危機意識が高まる 役割・物の扱い…対応の確認や見直しも出来る</li> <li>・日々の業務の中でCPRはほとんど無いが、いざという時に動けないと命を助けることはできない</li> <li>・今後も必ず年一回はしっかりシミュレーションを行いたい</li> <li>・シミュレーションは危機感…日常業務のあり方も見直すよい機会になった</li> <li>・医療機関に働く者として…受診者は高齢者も多いので安全を守るために気を張り詰める現場です…CPRシミュレーションを行うことによって…これから職務に活かせるよう…学んでいきたい</li> <li>・緊急事態には誤った判断はとても危険なこと…声かけはとても大事と実感した</li> </ul>	<p>危機管理意識が高まった</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・日々の業務の中でCPRはほとんど無いが、いざという時に動けないと命を助けることはできない</li> <li>・今後も必ず年一回はしっかりシミュレーションを行いたい 年一回では意識下に消えてしまう…</li> <li>・定期的に行うことで、実際の場面でスムーズに皆が動くことが出来るのではない</li> <li>・継続しないと…救命に支障をきたす事になる、そのような事がないように練習を続けていく事で身に付いていき自信にもなる</li> <li>・本を読んだり、ビデオを見たり…実際に動いてシミュレーションすることがとても大事で…</li> <li>・時間が経つと忘れてしまうので継続することに意味がある</li> <li>・回を重ねていくと冷静さも備わって対応の仕方もスムーズに行えるような気がします</li> </ul>	<p>定期的シミュレーションの大切さがわかった</p>

技師・助手も一緒になって心が一つになったようであった」、看護助手からは「救命処置はチーム皆の協力があって出来ることで連携はよくなると思います」と意見があった。また医療事務職からは「同じ意識をもって協力しないと迅速で良いCPRはできないので、シミュレーションをすることで息も合ってきて一体感も出てくると思う。またシミュレーション後のグループワークでコミュニケーションも図られるので自然と団結しやすく連携がよくなっていくと思う」「緊急事態には誤った判断はとても危険なこと、スタッフ間の声かけはとても大事と実感した」「日頃からチームワーク

を大切に、意識的に安全確保の知識を身につけていきたいと思った」との意見があった。

また、保健師は「看護師・医師だけでなく全スタッフの士気向上や結束にも役立つと思う」、さらに検査技師は「迅速な対応には皆の協力なしにはありえない、連携はシミュレーションによってよくなると思う」「メンバーの協力なしでは迅速かつ確かな対応は不可能だ」と思う。皆で連携をとって行動しようという意識が生まれる」と記述しており、迅速な対応をするためにも連携が必要で、CPRシミュレーションによって連携はよくなると感じていた。医師も「スタッフ各自で具体

的な役割分担を確認し、自覚できたのでチームの連携につながる」と記述しており、CPRシミュレーションによって医療関連職種の連携が強化されたと全職種の医療チームメンバーが感じていた。

4. 〈医療チームメンバー各自の役割意識が拡大して業務改善につながる気付きを得ていた〉

「スタッフ各自で具体的な役割分担を確認し、自覚できたのでチームの連携につながる」という前述の医師の意見は、CPRシミュレーションが医療関連職種間の連携強化だけでなく、スタッフ各自の役割意識が高まり、役割分担を自覚できたことを指摘している。看護師は「大腸ファイバー室の入口の椅子は、使用後に奥の部屋に片付けるようにCPRシミュレーション直後からしています。係りも決めて業務改善しました」と具体的な業務改善内容を記述していた。また医療事務職からは、「事務とはいえ病院の中に常にいるのだから、自分もよく理解しておくことで看護師の負担を減らして協力し合ってスピーディに作業を進めることができ、救命率もアップすると思った」「看護師の指示をきちんと確認して実行できるようになりたい」「受診者を誘導するシミュレーションもやりたい」と、避難誘導訓練が必要との意見があった。また管理栄養士から「シミュレーションと分かっているけど、スタッフの慌しい動きにドキドキしたので、実際にもお年寄りを慌てさせ転倒の原因になりかねないことが分かった。誘導時には、落ち着いた行動をとりたかった」と誘導時の具体的対応に関する意見もあり、救急時の他の受診者に対応する細やかな心遣いへの気付きがあった。

さらに医療事務職からは「家族への連絡を忘れていた」「家族への対応を設定していなかった」などの反省があり、目の前の受診者への対応だけでなく家族への気配りがみられ受診者の生活圏へと視野が広がっていた。そして「事務職でもできること、具体的には、緊急時コール・一斉放送・家族への連絡などを協力したい」「落ち着いた的確に状況判断して敏速に行動するなど何をすればよいか分かった」さらに「救急カート運搬時の障害物を片付ける、受診者への説明や誘導、保険診療カルテの依頼など正確に行動しなければならなかった」と、緊急事態に備えて役割分担と同時に、役割意識を拡大して業務改善につながる積極的な意見が多職種からあった。

5. 〈モラル (moral) が高揚し異なる職種のメンバーへの尊重と日常生活にも広がる可能性が生じた〉

医療事務職から「改めて命の重みを感じさせられた」、また看護師からは「皆の命を助けたいと思う気持ちが一つになったと思います」「チームの連携が大切、一分一秒でも患者を救おうと思います」「日々の業務の中でCPRはほとんど無いが、いざという時に動けないと命を助けることはできない」「常にそういう

場面を想定して受診者を守る為にも訓練・訓練…だと思います」と、モラルの高揚がうかがわれる意見が聞かれた。

さらに保健師からは「当部署の事務スタッフは、業務的に非常に優能なだけでなく意識が高い。自分の仕事でないと一蹴するかと思いきやシミュレーションの参加も意欲的で改善面の指摘も鋭い。一緒に仕事できて誇りに思った」、医療事務職は「シミュレーション終了後も人形を使用して看護師が互いに意見を出し合っていた」と、互いに尊重の言葉がありチームメンバーの異なる職種に対する敬意が顕れていた。また、「日常において、いつ・どこで・おこる事かもしれない、ある程度の知識は必要だと思うから、CPRシミュレーションは参加して良かった」と自分の日常生活の中での活用も考える意見があった。また検査技師や看護師も同様に「院外の普段の生活でも役立つと思う」とCPRシミュレーションを医療現場に特化し限定して考えるのではなく、日常生活の中や自分の身近なものとして捉え地域へと広げて考える意見があった。

6. 〈危機管理意識が高まった〉

医師は「『可能性があることは起こる』を前提に危機管理を行う必要があると思う」と危機管理の必要性を訴えていた。看護師も危機意識に関する多くの意見があり、「定期的に行うことで危機意識が高まる」「役割・物の扱い・不備の危機に関して迅速な対応の確認や見直しも出来る」「日々の業務の中でCPRはほとんど無いが、いざという時に動けないと命を助けることはできない。今後も必ず年一回はしっかりシミュレーションを行いたいと思いました」と記述していた。このような危機管理意識の高まりは他の職種の意見にもみられ、保健師は「シミュレーションは危機感・問題意識に・日常業務のあり方も見直すよい機会になった」、医療事務職も「緊急事態には誤った判断はとても危険なこと、スタッフ間の声かけはとても大事と実感した」「医療機関に働く者として、健診センターの受診者は高齢者も多いので安全を守るために気を張り詰める現場です。CPRシミュレーションを行うことによって何が起きても準備万端な体制でいることは大切。これから職務に活かせるよう基本から学んでいきたい」と記述しており、日頃から危機意識をもち漠然と不安があったことがわかった。そんな中、CPRシミュレーションによって安心し、実施の意義をよく認識していて、CPRの技術を学ぶ意欲があることがわかった。

7. 〈定期的シミュレーションの大切さがわかった〉

看護師から「日々の業務の中でCPRはほとんど無いが、いざという時に動けないと命を助けることはできない。今後も必ず年一回はしっかりシミュレーションを行いたいと思いました」、保健師は「年一回では意識下に消えてしまう。年二回（4月頃と10月頃）あつ

た方がよい」、看護助手は「定期的に行うことで、実際の場面でスムーズに皆が動くことが出来るのではないかと思う」「継続しないと忘れてたりスムーズに動作ができなくなったりで時間がかかり、救命に支障をきたす事になる。そのような事がないように練習を続けていく事で身に付いていき自信にもなると思う」と、CPRシミュレーションを継続するのは重要であるとの意見があった。また医療事務職から「本を読んだり、ビデオを見たり、話を聞くのも大切だけど、実際に動いてシミュレーションすることがとても大事で役立つことが分かった」と、CPRシミュレーションによって体感することの効用と大切さがわかったとの意見があった。さらに医療事務職から「時間が経つと忘れてしまうので継続することに意味があると思った」「回を重ねていくと冷静さも備わって対応の仕方もスムーズに行えるような気がします」という記述からCPRシミュレーションの継続の必要性を感じていることがわかった。

以上から健診センターにおけるCPRシミュレーションは、現任教育として必要であると、医師や看護師だけでなく事務職を含む医療関連職種ของทีมメンバー全体が現任教育として必要であると感じていたことがわかった。

#### Ⅳ. 考察

以上、得られた結果から、健診センターにおけるCPRシミュレーションが現任教育としてどのように有用だといえるのかについて考察する。

A. 救命という目的の共有によって連携が深まり業務改善につながる気付きを得ている

臨床現場で行うCPRシミュレーションには、単にCPRの手技など技術獲得に留まらない学習効果があることを、急性期病棟におけるCPRシミュレーションに関する著者らの先行研究では明らかにした。過去のCPRに関する研究では、救命率を向上させるための一次救命処置に関する教育のあり方の研究（小村, 2008, p.92；小村他, 2006, p.90；大高, 2004, p.19；高橋他, 2003；黒木他, 2004, p.214；茶谷他, 2001, p.45）や学校教職員や一般市民等への知識と技術の教育・普及の実態に関する研究（伴他, 2005, p.39；上山他, 1987, p.1836）は多く、一次救命処置に関する教育のあり方や学校教職員や一般市民等への知識と技術の教育・普及に関する実態や望ましいあり方を明らかにしている。しかしCPRシミュレーションが、一次救命処置の手技だけでなく看護管理および日常業務によい影響を与えていることは、あまり知られていない。

急性期病棟ではCPRに遭遇することが多くあるが、今回は、健診センターであり、緊急処置はあまりない。調査当初、医療関連職種がどれ程CPRに関心をもって

参加するか疑問であったが、質問紙調査結果でCPRシミュレーションは継続した方がよいと全員が回答し、「CPRシミュレーションを年一回ではなく、年二回に増やしてほしい」との記述もあり、また、参加してよかったが87%、また自分の業務に役立つが87%と、ほとんどのメンバーがCPRシミュレーションを積極的に評価していた。医療現場で働くすべての者は、「人を救いたい」という善意の気持ちを持っているといえる。直接診療に関わる医師・看護師等だけでなく、間接的に関わる看護助手・医療事務職等も、医療現場で働く者として、CPRが救命という医療の究極の目的に則っているため危機管理意識が強化され、医療チームの連帯感を容易に高めたと考えられる。さらに、CPRに直接関わらない医療事務職等のチームメンバーも積極的にCPRシミュレーションに参加することで安全に関する意識が高まり、連携が強化され業務改善につながる気付きを得ていることがわかった。つまり救命という目的を明確にすることにより、医療チームメンバー間の連携が深まり、業務改善につながり業務の効率が上がっていくとの示唆が得られた。

B. 連帯感の深まりは互いの役割意識を拡大させモラルが高揚し、異なる職種のメンバーとの信頼関係が高まる可能性がうかがえる

健診センターでは、様々な医療関連職種が同じ場所で行うため、日頃の医療チームメンバーの連携が大切になってくる。CPR時にも、医療チームメンバーの連携は不可欠である。今回健診センターでCPRシミュレーションを実施したことでメンバーの連携がよくなると96%が回答、健診センターで働くすべての職種が、CPR場面で、「今私は何をすべきか？」と考え自分の担当する業務の範囲以上のことにも目を向けて行動していた。

そして、様々な医療関連職種がいるからこそ明確な役割分担が必要で、医師と看護師がCPRに集中できるようにCPR場面で自分の果たすべき役割について考え、行動していた。また、誘導時の対応など、受診者に配慮したより受診者中心の意見が多かったのは、各々の職種の役割意識の現れであり、救命という目的に向かって自らの役割意識が拡大して業務改善が検討され、モラルの高揚につながっていくと考える。役割意識が拡大していった背景には、様々な医療関連職種の資格による業務制限があることによって明確な役割分担ができ、役割分担による細やかな連携が生じていることがあると考える。いかにすればCPR時に「今私は何をすべきか」と皆が考えて行動する中で、医療関連職種の資格による業務制限で、出来ない業務があるからこそ明確な役割分担ができ、各自が自分に出来ることを救命という目的に向かって精一杯行うことによって連携が深まり役割意識を拡大していったと考える。

そして、「一緒に仕事ができ誇りに思った」「シミュレーション終了後も人形を使用して看護師が互いに意見を出し合っていた」というお互いを尊重し、認める言葉が示すように、連携の深まりは、他の職種への関心と信頼関係につながる事がうかがえる。また「改めて命の重みを感じた」「皆の命を助けたい」等の記述からもモラルの高揚がうかがえた。日頃から危機管理意識をもちながら業務している中、緊急事態の発生に対応するために漠然とした不安を持っていたが、しかしCPRシミュレーションが行われることで、医療チームメンバー間の連携が深まり、懸命に努力しているメンバーの姿を見て信頼という相乗効果につながり、不安が一転して安心し、やがて信頼へと変化していったのではないだろうか。この信頼関係は、職場風土にもよい影響を与えていくものと考えられる。

### C. 健診センターでの様々な職種の参加から、日常生活への広がり可能性が示唆される

今回の調査結果と前回の著者らの先行研究(大出他, 2009, p.97)を比較して大きく異なる点は、今回の調査結果では、CPRを院外の日常生活の範囲まで広げて考える意見が多くあったことである。健診センターは、受診者の健康の保持増進を目的にすることから、日常生活の場面へと発想が繋がり易い。

今回医療現場の職場環境の改善のみならず個人々の日常生活の場面として地域への広がり可能性がみられたことから、CPRシミュレーションが現任教育という臨床現場に留まらず日常生活の中という地域社会における健康生活安全意識の啓蒙につながる可能性が示唆された。このように地域社会へと広がっていった背景には、参加者の職種の違いがあると考えられる。前回のCPRシミュレーションの参加者が、医師と看護師であったのに対し、今回の健診センターでは、医師、看護師、保健師、管理栄養士、検査技師、看護助手、医療事務と様々な医療関連職種が参加した。その為、CPRの活用範囲を一般化して院外の日常生活の場面へと広がり、地域社会への健康生活安全意識の啓蒙へとつながっていったのではないだろうか。

厚生労働省は、2001年より「医療安全対策検討会議」を開催し、医療安全対策を進めている。医療機関管理者に対しては、医療安全確保の義務化が行われた。このような医療安全の推進には、医療機関のみならず広く国民の期待や関心の高まりが背景にあると考えられている(三宅, 2005, p.1)。健診センターの受診者は、健康レベルの高い利用者が多く、より国民の考えが反映される現場であり、医療安全の推進が国民の期待や関心が高まっている現状であることから健診センターにおいてもCPRシミュレーションは、医療安全を推進する上で必要であると考えられる。

そして「蘇生成功率と予後の向上には、速やかなCPRが不可欠で、CPRを最も速やかに行えるのは、[そ

こに居合わせた市民]である。したがって、一般市民に対するCPRの知識と技術の教育、普及と、それによる速やかなCPRの実施が提唱されている」(岡田他, 2001, p.139)。今回健診センターで実施したCPRシミュレーションに健診センターで働く医療関連職者が積極的に参加して、医療現場という特化したものではなく自分の身近な問題として捉えて、自分の日常生活の中での活用も考えていたことは、一般市民としての立場からのCPRの知識と技術の教育、普及にもつながっていく可能性も示唆された。

## V. 研究の限界と今後の課題

本研究の対象は、総合病院の健診センターで行った。健診センターには単独で設置されるものもあり、職員構成や現任教育のあり方も異なることから、そのような施設においても今回と同様の結果が得られるとは限らない。またCPRシミュレーションの現任教育はファシリテーターの役割が大きく、熟練したファシリテーターの存在が不可欠である。ファシリテーターが未熟であると逆効果の場合も考えられる。今後ファシリテーターの能力についての研究や健診センターの位置づけが異なる施設においてもCPRシミュレーションは、健診センターの現任教育として有用であるといえるかは今後の課題である。

## VI. 結論

健診センターにおけるCPRシミュレーションは、チームメンバー間の連携の強化、モラルの高揚、また、危機管理の側面からは各々の役割意識が拡大し、業務改善につながる気付きを得ており、さらにチームメンバーが多様であることから、CPRの知識と技術が日常生活へと広がる可能性も示唆された。

### 謝辞

この研究を行うにあたり、調査に協力して下さいました健診センターの医療チームの皆様および匿名の査読者の方々に心より感謝いたします。なお本研究は、平成20年度日本赤十字看護学会研究助成を受けた研究である。

### 文献

- 伴佳子・浦部誉子・水本真由美(2005). 心肺蘇生法標準化のためのACLS導入初期の評価. 第35回日本看護学会論文集, 看護管理, 39-41.
- 黒木朝子・前田恵美子・川住幸恵・加藤洋子・森山克美・田子森和子・森はつみ・安藤まり子・杉浦稜子・伊藤安恵(2004). 医療事故発生時の対応訓練による教育効果をいかして名古屋第二赤十字病

- 院の取り組み. 看護管理, 14 (3), 214-220.
- 小村佳代 (2008). 川崎病院における新人看護師BLS講習. 川崎病院医療ジャーナル, 3, 92-96.
- 小村佳代・吉川慶三・山本英一 (2006). 院内ACLSを広める活動のあゆみ. 川崎病院医療ジャーナル, 1 (1), 90-92.
- 三宅祥三 (2005). 医療施設における療養環境の安全性に関する研究. 平成16年度総括研究報告, 医療技術評価総合研究事業.
- 大出明美・嘉手苺英子 (2009). 臨牀現場で行うCPRシミュレーションの看護管理上の意義. 日本赤十字看護学会誌, 8 (1), 97-102.
- 岡田和夫・手塚新吉・美濃部峻・佐藤拓夫 (2001). 学校教職員の心肺蘇生 (CPR) - CPRの知識、講習会の反省と評価 -. 20 (2), 139-144.
- 大高美穂 (2004). 二次救急病院ERにおけるACLS導入-救急隊とのCPA搬送合同シミュレーション-. 茨城県救急医学会雑誌, 27, 19-21.
- 高橋宏・田島啓一・水谷太郎・齊藤重行・猪股伸一・宮部雅幸・豊岡秀訓 (2003). 一次救命処置手技における教育のあり方に関する検討. 麻酔と蘇生, 39 (1), 1-5.
- 茶谷亜希子・藤部しのぶ・真野敏夫・亘文恵・高田貴美子 (2001). 病院内看護婦に対する心肺脳蘇生法教育の検討. 日本救急看護学会雑誌, 2 (2), 45-55.
- 上山英明・青地修・清野誠一・後藤裕・平川方久・藤田達士・村上誠一・森岡亨 (1987). 心肺蘇生法の教育・普及に関するアンケート調査報告. 麻酔, 36 (11), 1836-1840.